要　請　書

四国電力社長　千葉昭　殿

原発さよなら四国ネットワーク
連絡先　大野恭子　TEL089-933-4237

２０１１年3月　18 日

この悲惨な、言葉で言い表すことのできない現実の前で、私達はただ呆然と立ちつくすことしかできません。
たくさんの被災者の方々を思い、深い悲しみに暮れるばかりです。
今こそ、３０年間、あなたがた四国電力が言ってきた「５重の壁に原子炉は守られているから何があっても大丈夫」「どんな地震が来ても想定内ですから耐えられます。地震、津波の影響はありません。」という言葉が本当であればいいと痛切に願います。
しかしそれはむなしいことであり、とうとう取り返しのつかない事態になったことを認めないわけにはいきません。

福島原子力発電所では、複数の原子炉内の核燃料だけでなく、使用済み核燃料のプール冷却も出来なくなり、核燃料の露出による水素ガスの発生、爆発が起きており、私達は大きな戦慄、恐怖を感じています。

今回の地震の規模が大きいことを、事故の理由にすることは許されません。地震時に外部電源の喪失に重なって、非常用電源の喪失の事態を想定しなかったこと自体が、大事故の発生、対策を軽視していた証拠です。
「想定外」の言葉を濫用する国や電力会社の姿勢は、事故は天災であり自分たちに責任はないといわんばかりです。
日本の沿岸地震では、ほんの 100 年ほど前の 1896 年（明治 29 年）の明治三陸地震津波で、岩手県沿岸の綾里（りょうり）では 8.2m、吉浜（よしはま）24.4m、田老（たろう）14.6m の津波の高さが記録されています。
大地震と大津波を「故意に想定しなかった」電力会社の責任は重く、まさにこのたびの原発震災はそういった想定をせず原発政策を推進してきた「人災」です。

東北・関東大地震に連動する可能性のある「東海」「東南海」「南海」地震、そして伊方沖の A 級活断層は活動期にあります。プルトニウムを多量に含む、通常運転よりさらに危険な伊方原発 3 号炉のプルサーマルの強行も許せません。

今回の事故は伊方原発にそのまま重なるものです。
正しい情報が隠され、福島原発の近くに今も足止めされ「放射能は直ちに身体に影響ありません」という虚偽の発表を出し続ける国や学者の姿を見て、私達はなんという国に生きているのかと、腹だたしく悲しくてなりません。
電力会社の利益のために、国策のために、私達は原発震災の被害者になるのは嫌です。

貴社の方針の誤りを認め、子どもたちや未来の人々のため、地球上のあらゆる命のため、伊方原発を即刻停止してください。